

進む通信とIT技術の融合 見えてきたFMCへの道

IP化、光化の進展の中で、通信事業者のシステムとサービス開発に劇的な変化が生じている。これをテーマとした初のコンファレンスが開催された。

3月25日、東京有楽町の東京国際フォーラムで、最先端通信技術をテーマとした専門セミナー「次世代ネットワークサービスコンファレンス2005」が開催された。

コアネットワークのIP化、光アクセスネットワークの本格展開など、通信サービスを汎用的なIPベースの技術によって再構築しようとする動きが世界中の通信事業者の間で急速に進展している。これに伴って顕在化してきたのが、電話をベースに構築されてきた通信技術と、インターネットやコンピューターに使われてきたIT技術の融合である。すでにWebベースの各種技術や、IP電話の基盤技術であるSIPやVoIPなどは、通信サービスの提供に不可欠なものとなっている。

さらに、コンピューターやIPネットワーク技術の側から、新しい提案が



150名の参加を得、盛況のコンファレンス

始まっている。ネットワークの違いを超えた共通APIを策定し、通信サービスの開発を効率化するとともに、企業の情報システムとネットワークサービスとの連携を容易にするParlay。Javaを活用してまったく新しい通信サービスを容易かつスピーディーに実現するJAINなどだ。これらの技術は、FMC(固定通信と移動通信の融合サービス)やユビキタス・ブロードバンドのキーテクノロジーとも目されている。

今回のコンファレンスは、こうした次世代の通信技術のトレンドを紹介するものだ。固定通信や移動通信事業者の研究開発部門や企画部門の担当者、国際規格担当部門を中心に、定員を上回る150名が参加。次世代の通信技術への関心の高さを窺わせた。主催者は、今秋第2回のコンファレンスを予定している。

iモードの次はFMC

冒頭、NTTコミュニケーションズ常務取締役・先端IPアーキテクチャセンタ所長の飯塚久夫氏が、「NTTの次世代ネットワークサービス構想」と題して基調講演を行い、NTTが進めている光・IPのネットワーク基盤上



基調講演を務めるNTTコミュニケーションズ常務取締役 飯塚 久夫氏 (左) と、パレイグループ・プレジデント スイグムント・ロジンスキー氏 (右)

での次世代サービス、新アーキテクチャーの研究開発の取り組みと、同社の次世代サービス構想を紹介した。

飯塚氏は、次世代ネットワークの構築のキーテクノロジーとして、IP-VPNの実現技術「MPLS (MultiProtocol Label Switching) を高度化し、複数ネットワークレイヤを統合的に制御するGMPLS (Generalized MPLS) をあげ、GMPLSベースのシングルアーキテクチャー上で様々な通信サービスが統合される次世代ネットワーク像を提示した。

移動通信における最大のエポックといえるiモードの成功は、ユーザー自身がそれまでになかった利用法を見いだすことでブームを起こしたポケットベル、PHSという2つの波をうけて成立した第三の波だと指摘。iモードに続く次のエポックは、固定通信と移動通信、通信と放送の融合がもたらすという見方を示した。

Parlay 対応アプリは110に

次いで演壇に立ったのが、Parlayグループのプレジデントを務める、Telecom IBMシニアテクニカルディレクターのズィグムント・ロジンスキー氏。「Parlay 構想と次世代通信サービス」と題して、Parlayの概要ととも

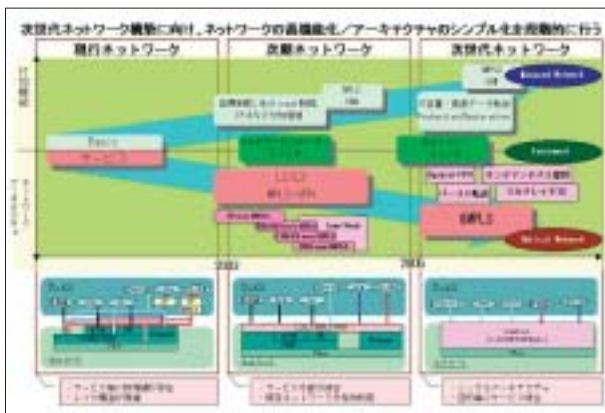


BEAシステムズ グローバル通信市場担当シニア・ディレクター クリス・キング氏(左) と、AePONA社 プリンシパルプロダクトエバンジェリスト ジェームス・アトキン氏(右) (左2枚)
マクニカネットワークス 米満慎悟氏(左) と、Appium社 VP Sales of APAC ドミニック・リレイ氏(右) (右2枚)
サン・マイクロシステムズ テレコミュニケーション・ビジネス・デベロップメントマネージャ ステファン・ボルガ氏(左) と、NEC 第一ネットワークソフトウェア事業部 統轄マネージャ 吾郷 真治氏(右) (最右2枚)

に、通信事業者が直面する問題の解決にParlayがどのように貢献できるかを導入事例を交えて解説した。

Parlayは、ネットワークシステム開発のアーキテクチャー。APIを共通化することで、サービスの開発を効率化し、同時に企業の業務アプリケーションと通信サービスの連携を容易にすることを狙って策定された。IBM、エリクソン、ルーセント、富士通や通信事業者など約70社が参加する国際団体「Parlayグループ」が推進している。

Parlayで、通信サービスと業務アプリケーションを連携させる際にキーとなる「Parlayゲートウェイ」は、2004年11月時点で27製品がラインナップされている。Parlay対応アプリケーションは101製品。開発環境などの関連製品を含めると238製品がラインナップされていると報告。Parlayが通信サービス開発における標準プラットフォームの地位を確立しつつあ



NTTコミュニケーションズが描く次世代ネットワークのアーキテクチャー

ることを印象づけた。さらにロジンスキー氏は、Webサービス技術と連携できるParlay-X技術が普及することで、Parlayの可能性はさらに大きく広がるという見方を示した。

次いで、BEAシステムズ・グローバル通信市場担当シニアディレクターのクリス・キング氏が「キャリアにおける通信とITの融合による次世代サービス」と題して講演。「通信事業者は今後競争を勝ち抜くために、サービスの差別化を迫られる」とした上で、このニーズがBEAの通信事業者向けプラットフォーム製品上でどのように実現できるかを述べた。特に有望なソリューションとして、ネットワークがユーザーの移動先を追跡、最適な通信手段を判断し、人と確実に連絡の取れるシステムを紹介し、関心を集めた。

Javaの開発環境生かす

午後の部の冒頭では、Parlay対応製品をいち早く市場に投入したアイルランドとスウェーデンのベンダーが講演。AePONA社プリンシパルプロダクトエバンジェリストのジェームス・アトキン氏がParlay OSA/Parlay Xについて、Appium

社VP Sales of APACのドミニック・リレイ氏がParlay対応のアプリケーションサーバーの特徴や実装について解説した。

両社の製品を扱うマクニカネットワークスの米満慎悟氏が、これらの世界展開の状況を報告した。

次いで、サン・マイクロシステムズ、テレコミュニケーション・ビジネス・デベロップメント、マネージャのステファン・ボルガ氏が登壇。ネットワーク資源を最大限に活用する次世代ネットワークサービスの開発および実行環境として注目されているJSLEEの概要と有効性について解説。JSLEEがParlayとの連携を実現しており、Javaの開発環境を活かして、通信サービスの開発を大幅に効率化できると強調した。

SIP / Web 連携に可能性

最後のセッションでは、NEC第一ネットワークソフトウェア事業部統轄マネージャの吾郷真治氏が、「ITとSIPネットワークによるコラボレーション戦略」と題して、NECのSIPベースソリューションを軸とした次世代ネットワーク構想を紹介。WebアプリケーションとSIPコミュニケーションシステムを連携することで、キャリアの次世代サービスに対するニーズの相当部分が実現できる可能性を示唆した。